

令和5年度 研修員個人研究 研究要約（No. 1）

令和5年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

所 属	氏 名	研究主題及び研究副主題	研究要約
企画・次世代型研修推進課	船戸 賢太郎	責任ある行動をとる力を自ら育む情報モラル教育の充実 ～デジタル・シティズンシップ教育の視点を取り入れた授業実践を通して～	<p>予測困難な時代といわれる現代の情報社会において、学校内外を問わず、児童生徒のデジタルの利用は日常となった。よって、学校における情報モラル教育の充実が必要不可欠であり、さらなる情報活用能力の向上が求められている。</p> <p>本研究では、特別の教科道徳と特別活動（学級活動）の2時間続きの授業を構成し、デジタル・シティズンシップ教育の視点を用いた5段階の思考ルーチンを取り入れた実践を行った。実践検証授業2時間目の学級活動では、模擬体験を行うことで、他者との価値観や考えの違いに気づき、学習を通して身に付けた知識や態度を、実生活の場面での活用に向けた意識付けや、自ら考えて行動するきっかけとすることができた。</p> <p>このような授業実践を行うことで、本県の情報モラル教育に携わる教員の一助となったと考える。</p>
義務教育研修班	榎 憲悟	中学校社会科としての「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指した授業づくり ～「パフォーマンス課題」を基軸とした単元構想と子供の姿が見える「ループリック」による評価を通じて～	<p>本研究は、単元を貫く「パフォーマンス課題」を基軸とした単元及び授業を構想し、その実践と検証を通して、「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指す授業の在り方を提案するものである。</p> <p>研究にあたっては、昨年度に作成した地理的分野「日本の諸地域」の「中国・四国地方」における単元構想及び「ループリック」を取り入れた生徒用ワークシートを基に授業実践を行った。検証では、生徒用ワークシートの活用が、「思考力、判断力、表現力等」の育成につながるものになっていたかと、「パフォーマンス課題」を基軸とした単元構想をふまえた授業実践が単元の学びの一体化を図るものになっていたかの2点について分析した。</p> <p>本研究を通して、「理由」を裏付けるための「根拠」を見いだしたり、「自分の考え」に結び付く「理由」を選択したりする学びを促すことで、「思考力、判断力、表現力等」の育成の一助となるということが明らかになった。</p>
	立山 遥子	自分の言葉で考えを語る生徒を育てる国語科の授業づくり ～「読むこと」における「言葉による見方・考え方」を働かせるための教師の働き掛けの工夫を通して～	<p>全国学力・学習状況調査や長崎県学力調査の結果から、本県生徒は文章を読んで理解したり自分の考えを表現したりする際に「言葉による見方・考え方」を十分に働かせることができず、文章を「正確に理解」し「適切に表現」することができていないのではないかと考えた。</p> <p>そこで本研究では、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせるとはどのようなことか明らかにし、そのために必要な教師の働き掛けを具体的に整理した。また、整理した教師の働き掛けを基に「読むこと」の領域で授業を構想し、検証授業を実施した。</p> <p>その結果、昨年度の成果物である「考えるための技法」の有用性が実証されるとともに、「考えるための技法」に基づいた教師の働き掛けの必要性を再確認することができた。さらに、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせることのよさに気づき、自分の言葉で考えを語る姿を見ることができた。</p>
	三根 祐太郎	「学びに向かう力、人間性等」を涵養する社会科授業に関する研究 ～子供のメタ認知を促す場面を設定した単元構想と学習過程が見える振り返りシートの開発を通して～	<p>本研究は、子供のメタ認知を促す場面を設定した単元構想と学習過程が見える振り返りシートの開発とそれらを用いた授業実践によって、子供が学習したことを振り返ったり、それを基にして次の学習の見通しを立てたりして、自ら学習状況の把握・調整を行うようになることで、「主体的に学習に取り組む態度」が養われ、「学びに向かう力、人間性等」が涵養される社会科授業の在り方を提案するものである。</p> <p>研究にあたっては、社会科における「学びに向かう力、人間性等」の具体を明らかにするとともに、この資質・能力を涵養するメタ認知を働かせた学習の在り方について考察した。また、中学校社会科歴史的分野「古代までの日本」の「古代国家の歩みと東アジア世界」を題材に、単元構想と振り返りシートの具体を示し、「メタ認知」を働かせた学習をいつ、どのように行わせるかということを明らかにした。</p>

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館3階）にありますので、是非御覧ください。

令和5年度 研修員個人研究 研究要約（No. 2）

令和5年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

所 属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
義 務 教 育 研 修 班	野口 稿二	中学校理科における科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した指導の在り方 ～探究の過程での「考察・推論」場面における具体的な教師の働き掛けを通して～	自身の実践の振り返りと令和4年度全国学力・学習状況調査中学校理科の結果から、「探究の過程」における「考察・推論」場面での指導の工夫・改善の必要があることが分かった。 そこで、本研究では、自身の課題と長崎県教育センターが作成したリーフレットを踏まえ、「考察・推論」における「子供の姿」を具体的に想定し、意図的な「教師の働き掛け」を構想することとした。 今年度の研究では、「考察・推論」場面における「教師の意図」を明確にして評価基準を設定し、生徒が観察・実験の結果を分析して解釈し、どのような記述をするかといった「子供の姿」を具体的に想定し、考察類型を作成した。これによって、根拠の示し方や表現の仕方など「子供の姿」を見取る幅が広がり、「子供の姿」を見取る視点を持つことができるようになった。
	大島 優美	自力で読み取り、考える力を育む小学校算数科における指導の在り方 ～導入段階における読解力の視点からの手立てと自力解決につながる支援の充実を通して～	これまでの自身の実践を省みたとき、問題を読み取って式に表したり、計算の仕方や式の意味について考えたことを表現したりすることが苦手な子供たちに対する指導の在り方に難しさを感じてきた。全国学力・学習状況調査においても、式の表現と読みに関することや問題を正しく読み取ること、自分の考えをまとめ表現することが課題であると挙げられている。 そこで、本研究では、小学校算数科における自力解決に至るまでの学習過程に焦点を当て、問題を正しく読み取る際に有効な手立てについて整理した。また、自分の考えを表現するため ICT を活用した補助教材を作成し、カンファレンスを行った。その結果、問題を正しく読み取るための手立てや、子供たちの思考の流れに沿った教師の働き掛けが大切であることが分かった。自力解決につながる有効な支援の在り方についてまとめた。
	吉野 美穂	「差別に気づき、差別を許さず、差別をなくそうとする実践行動の育成」を目指す学習の提案 ～体験的参加型学習における学習プログラムの実践を通して～	本県の学校において公正採用選考実現のための取組が続けられてきたがまだ十分な実現には至っていない。子供の貧困やヤングケアラーの問題等も大きな課題であり、自分に責任のないことで進路を阻まれている可能性がある。生まれた環境によって子供の人生が左右されない社会を実現していくために、学校が果たす役割は大きいと考える。すべての子供の進路保障実現を目指した取組を進めるためには、教師自身の知的理解と人権感覚を向上させ、効果的に学習に取り組んだり子供との信頼関係づくりを進めたりすることが必要だと考える。 そこで本研究では、不適正採用選考や子供の貧困問題等の現状や課題を分析し、進路保障の視点を踏まえて整理した学習プログラムを教職員対象の研修会で実施・検証した。参加者の振り返りから、演習が教職員の知的理解と人権感覚の向上、人権尊重社会の実現に向けた実践力を育むために有効であることが分かった。
	長瀬 陽一	「小中高の各学校、各学年で自信をもって取り組める部落問題学習の系統的なカリキュラム」の提案 ～部落問題学習の目標や内容の整理と教材の例示を行い、より広く実践されることを目指した試み～	県内の教職員実態調査結果によると、部落差別の解消に向けた取組への意欲は高いとは言えない状況がある。子供たちには差別を乗り越え、自他の人権を尊重する実践行動を身に付けてほしい。そのためには、各学校、各学年段階での系統的な指導内容を例示することが求められると考えた。そこで、必要と考えられる学習内容を「人権教育の指導方法等の在り方について 第三次とりまとめ」に照らし合わせることで、目標としての実践行動までの系統性を示すことを構想した。部落差別の解消に向かう学習が、県内で広く実践されることを目指して研究を行った。

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館3階）にありますので、是非御覧ください。

令和 5 年度 研修員個人研究 研究要約（No. 3）

令和 5 年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

所 属	氏名	研究主題及び研究副主題	研究要約
高校教育研修班	澁谷 理絵	物事を多面的・多角的に捉える力の育成を目指した数学科の授業づくり ～高等学校数学における教科等横断的な学びを通して～	グローバル化や情報化等により社会構造は急激に変化しており、予測困難な時代を迎えている。そのような中、改訂された平成30年3月告示の高等学校学習指導要領解説総則編の教育課程の編成には「各教科・科目等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」とある。これらを関連付けて考えると、各教科の学びをつなぎ、幅広い知識や技能・技術を用いながら、物事を多面的・多角的に捉える力を養うことが重要であり、それによって今この「変化の激しい」「先行き不透明な」現代社会に対応できる「生きる力」につながると考えた。 本研究では、物事を多面的・多角的に捉える力の育成を目指した他教科との横断的な授業実践を行い、その効果を検証した。この実践により、教科等横断的な授業が物事を多面的・多角的に捉える力の育成に資することが確認できた。
	中野 尚子	科学的に探究する力を育むための高校化学の授業づくり ～パフォーマンス課題による探究的な学習の実践を通して～	高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説理科編理数編では、理科において、資質・能力の育成に向けて、科学的に探究する学習活動の充実を図ることが求められている。 本研究では、長崎県公立高等学校教諭にアンケート調査を行い、観察、実験の実態や、探究的な学習活動の実態を把握した。また、重点を置く探究の過程を絞り、パフォーマンス課題による探究的な学習の実践を行い、探究の過程における生徒の振り返りから、科学的に探究する力を育むことができたかを探った。これらの取組により、生徒が新たな知識概念を構築しようとする姿、自身の学びを自己調整する姿、事象を批判的に見る姿などが見られ、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につながった。
特別支援教育研修班	田中 早紀	情緒障害特別支援学級担任と英語担当の連携による英語科における学習支援の充実 ～「実態把握シート」と「支援例集」を活用した個別の指導計画の作成を通して～	情緒障害特別支援学級担任は、在籍する生徒の各教科の学習支援や配慮を考えるために、教科担任と連携することが大切である。また、障害の状況に応じた指導をきめ細かに行うために個別の指導計画を作成し、活用していく必要がある。しかし、自身が個別の指導計画を作成する際、教科担任と連携することや生徒の実態に合った支援内容を設定することが難しく、何か手立てが必要だと感じていた。 そこで、昨年度は、情緒学級担任と英語担当が共通の視点をもって実態把握を行い、支援や配慮について一緒に検討し実施していく「実態把握シート」と、支援を考える際に参考にすることができる「支援例集」を作成した。 今年度は、活用方法を実践検証協力校に提案し、情緒学級担任と英語担当に活用してもらうことで、生徒の実態把握や英語科の学習支援について効果的に連携することができるものとなっているか、また個別の指導計画を作成する一助となったかを検証した。
	中山 彩	高等学校における特別な支援を要する生徒の進路実現を目指して ～フローチャートの活用を通して進路指導における校内支援体制の強化を図る～	進路指導における校内支援体制の構築には、進路指導部や特別支援教育コーディネーター、担任等それぞれの立場で行ってきた進路指導を可視化し、共通理解を図る必要があると考える。昨年度は3年間を見通せる「特別な支援を要する生徒の進路指導フローチャート」を作成した。本研究では、昨年度の研究から見えてきた課題を解決するために、特別な支援を要する生徒の進路指導経験がある、高等学校における通級による指導担当者へアンケート調査を行った。アンケート結果をもとに、カテゴリーごとに分ける、活用方法例を記載する、関連情報のリンクを貼る等の工夫を行い、フローチャートを改良した。実践検証協力校におけるアンケート調査や聞き取り調査をもとにさらに改良を加え、フローチャートを完成させた。検証の結果、フローチャートを活用することは、特別な支援を要する生徒の進路実現のための校内支援体制充実の一助となりうるという結果を得た。

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館3階）にありますので、是非御覧ください。

令和5年度 研修員個人研究 研究要約（No. 4）

令和5年度 長崎県教育センター研修員の研究主題・副主題及び研究要約は以下のとおりです。

所 属	氏 名	研究主題及び研究副主題	研究要約
特別支援教育研修班	向井 美保	小・中学校の難聴特別支援学級に在籍する聴覚障害児の支援の充実を目指して～難聴特別支援学級の担当教員のニーズを踏まえたスターターブックの作成を通して～	筆者は以前、ろう学校での勤務経験があり、その当時からろう学校幼稚園修了後、地域の小学校へ就学する児童が一定数いた。小学校の難聴特別支援学級（以下、難聴学級）に就学した児童の保護者から、特別支援教育に携わった経験のない教諭が担任になったことや、児童の聞こえの状態や実態に配慮した学習指導や支援をしてもらえないことについて相談を受けることがあった。このことから、難聴学級を担当する教員が、経験したことがない分野の指導・支援に対して多くの不安や戸惑いを抱えているのではないかと推察される。そこで、難聴学級の立ち上げや指導を担当する教員の不安や戸惑いについて調査し、その結果をもとに「スターターブック」を作成した。これを活用してもらうことで、難聴学級に関わる教員が見通しをもって年度初めの学級経営や聴覚障害児への指導・支援に取り組むことができると考える。
教育相談班	村松 玲子	生徒が自己理解を深め、よりよい人間関係を形成していくための支援の充実～互いを認め合う交流活動の実践を通して～	核家族化やインターネットの普及、コロナ禍といった社会の変化に伴い、子どもが多様な他者と直接関わる機会が減少してしまい、自己理解や他者と関わる力が乏しくなっていることが考えられる。このことから、自己理解や他者と関わる力を身に付けるための活動を、学校教育の中で意図的・計画的に行う必要性を感じた。 本研究では、「ミニトーク」という互いを認め合う交流活動が、人間関係を形成するための土台づくりとなり、生徒が自分を理解し、人と適切に関わろうとする意欲を高めることを目指して、実践検証を行った。 実践により、生徒が活動を前向きに捉え、意欲的に取り組む姿が見られた。アンケートの結果からは、生徒の自己理解や自己表現、人と適切に関わろうとする意欲の高まりが見られ、実践に一定の効果を得ることができた。
	原 尚史	算数科の支援の充実を目指して～「わかった」「できた」につながるICT活用を含めた支援集の作成を通して～	文部科学省（2022）の調査によると通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は増加してきているが、支援が十分に行き届いているとはいえないという結果が報告されている。自身の教職経験の中でも、学習上の困難さを抱える児童を担当したことがあり、特に算数科においてそれが顕著だったが、効果的な指導ができていたのかは疑問が残る。そうした中でも、ICTの活用が児童の学びに役立つことがあり、学習支援の有効な手立てになりうると感じた。 そこで、本研究では算数科学習における児童のつまずきとICTの活用を含めた手立てを記載した支援集を作成した。支援集を活用して、授業前に児童のつまずきを予想し、教師の手立てを明確にすることができれば、困難さを抱える児童のみならず、全ての児童に対する学習支援充実の一助になると考える。

詳しい内容をお知りになりたい方は、研修員個人研究報告書が玖島の杜図書館資料室（本館3階）にありますので、是非御覧ください。